



file.75

## PROFILE OF ALPINE CLIMBING

アルパインクライミングのプロファイル

北壁のヘッドウォールに登る  
マルティネスと筆者。

# フエゴ島サルミネント 57年ぶりの第2登

南米大陸最南端、フエゴ島のモンテ・サルミネントは16世紀の航海者によって発見された。マゼラン海峡の海辺から2000メートルも屹立する氷の山は白いスフィンクスの異名で呼ばれ、1976年の初登頂後57年間にわたって再登を許さなかった。

文◎カミロ・ラダ 訳・横成◎池田常道  
写真◎CORDARWIN 13





## 地の果ての島

広大な南米大陸はその最南端に至って無数の島々と海峡、フィヨルドに分解される。ここは地球上最も居住に適さない僻地のひとつで、まだ十分さがらされていない山も多い。有名な探検家エリック・シプトンはこの地をフエヒアと呼んだ。パタゴニア地方の一角を占めるここは独特の困難と魅力を備えた土地で、古くから船乗りを畏怖させてきた海、「荒れ狂う南緯50度線」の核心部にあたる。

フエヒアそのものはチリのマゼラン州とアルゼンチンのティエラ・デル・フエゴを含んでいる。目立つ高



BCから樹林帯を抜けてヴィットーレのCOLを目ざす (8月20日)。



峰はアンデス山脈の最南端にあたるダーウィン山脈にある。その名は、もちろん有名な博物学者チャール

ズ・ダーウィンに由来する。英国海軍の水路調査隊に同行した彼は、自然界に対する人間の常識をくつがえ

す、さまざまな発見を行なった。ダーウィン山脈は、長大なアンデスのなかで唯一東西方向に走る140キロの山脈で、南米プレートではなくスコシアプレートに乗っている。その大部分は海からでないと近づけない。いまは定住する人もなく、最も近い町といったら、東へ50キロ離れたウシュワイア(アルゼンチン)か北へ140キロのプンタ・アレナス(チリ)しかない。

この緯度では西からの風が卓越するが、南半球ではそれを遮る陸地が少ないため、太平洋の湿気を十分に含んだ強風が吹き付けてくる。パタゴニア南部はそこに立ちほだかるただひとつの障害だから、絶え間ない風が大量の雨や雪をもたらす。

フエヒアの間々は、したがって海から直接吹く風によって厚い雲におおわれ、頂上部には特徴的な霜氷(ライムアイス)の巨大な帽子が形成される。フエヒアの魅力の大部分は、嵐によってもたらされる神秘的な雰囲気にある。シプトンの言を借りれば「運命の羨望の地」ということだ。ダーウィン山脈の最高峰は2568メートルのモンテ・シプトン(旧ダーウィンI峰)で、山脈の中心部に位置する。しかし最も有名なのは、マゼラン海峡に臨む2207メートルのモンテ・サルミエントだろう。



サルミエント北面の空撮画像。

## 海賊の物語

1580年のこと、私掠船船長のなかでも名を知られたフランシス・ドレーク追撃戦のうちに、ペドロ・サルミエント・デ・ガンボアがこの山を認め、山容をスケッチして「ボルカン・ネバド（雪をかぶった火山）」と呼んだ。山頂部にたなびく嵐の雲が火山の噴煙に見えたのである。

東西二つの頂を持つサルミエントについては後年、ロバート・フィッツ・ロイが詳細に伝えている。彼はフリープ・パーカー・キングと共に、1826年から36年にかけて英国海軍のビーグル号およびアドヴェンチャー号に乗り組んでこの地を探検して、南米大陸最南端の地理を解明、秘密のヴェールを取り去った。この山が火山でないことも分かり、発見者の名を冠してモンテ・サルミエントとした。

もちろんこうした命名の権利は、1万年も前にこの地にやってきた原住民——ヤガン族やカウエスカル族に帰するものだ。しかし、世界最悪の気候を何世紀も生き抜いた彼らも、ヨーロッパからの植民がもたらした虐殺や病気には勝てず、その世界を支配していた山にまつわる伝説と共に消えていった。

19世紀後半に蒸気船が登場し、大西洋と太平洋を結ぶ海峡を行き来するようになると、サルミエントの評判はいつそう高まった。マゼラン海峡の黄金時代は、パナマ運河が開通する1914年まで続いた。つねに雲におおわれたサルミエントの全容を見ることができた機会はそう多くもなかったが、幸運にめぐまれた船上の旅行者たちは、その雄大さと比類ない美しさを讃える文章を遺している。都市の住人が、2000年以上もそびえる氷壁を海岸から数キロのところから望める場所は、地球上ここだけなのだ。フランスの小説家ジュール・ヴェルヌも、1860年に発表したその作品『海底二万哩』にその記述を取り入れている。

## 氷のスフィンクス

やがて、得体のしれない山に対する怖れや不安がぬぐわれて好奇心にとって代わると、この山に登ってみようという興味を抱く者が現れてきた。

サルミエントの登山史は、南北アメリカ大陸を通じて最も長いもののひとつである。合衆国やエクアドルでいくつかの高峰が登られていた時代、マウント・レーニアが初登頂された直後にそれは始まった。アラスカのセント・イライアスが試みられるよりずっと前で、デナリ（マッキ



ンリー)が北米最高峰であることも知られず、フォラカーに至ってはまだ名前さえ付いていなかった。イタリアの地理学者ドメニコ・ロヴィサトは1982年に初めてサルミエントを試みたが、この山の難しさを過小評価していたことを思い知らされる結果に終わった。

19世紀の末、ボリビアでイリマニに登り、アコンカグアの第2登を頂上直下で断念した英国のウィリアム・マーティン・コンウェイは、1898年12月にサルミエントを訪れ、現在その名を冠して呼ばれる氷河を標高10000mの地点まで登った。このとき彼は最良のアプローチルートを見つけたばかりでなく、その報告によってサルミエントがフエゴ島の王であることを示してみせた。

20世紀を迎えると、サレジア神父にして不屈の探検家アルベルト・デ・アゴステイニが登場する。サルミエントの山容に魅せられた神父は1913年から14年にかけて登頂を試みた。

サルミエントの評判は高まるばかりで、サン・ルーは1952年に書いている。「新大陸で最も美しい山であるセロ・トーレに比肩するものだ」と。この言葉に触発されて、多くの登山家・探検家がこの山に登ることを考えはじめた。

アゴステイニ神父が若いころ抱いた夢は1956年、彼が73歳を迎えた年に実現をみた。彼の隊は2ヶ月近くにわたって試登を繰り返した末にカルロ・マウリとクレメンテ・マツフェイが、濃霧と強風について主峰である東峰を陥れたのである。アゴステイニの「氷のスパインクス」、神秘の頂はついに登られた。

### それから57年…

彼らの足跡を追う遠征は1960年代なかばから始まった。1965年から66年にかけて、日本の北海道大学隊がサルミエント主峰の再登を狙った。登攀隊長の佐伯富男と遠藤禎一、橋本正人の3人は2月8日、南東稜の1800mまで追ったところが悪天候のため敗退した。頂上こそ逸したものの、ダーウィン山脈における重要な試登のひとつである。

イタリアのジュゼッペ・アニョロツティもサルミエントの魅力の虜となり、1969年、71年、72年と、60m低い未踏の西峰を狙って遠征を繰り返した。頂上までわずかの地点まで迫ったのだが、「残る2ピッチは絶望的だった。あと一歩で勝利を逃したわけだが、美しさと苦痛に満ちた挑戦だった」と語るその報告のタイトルは「白い地獄・サルミエント」という。

1976年、セサル・ペレス・デ・トウデラとフェルナンド・マルティネスのチリ隊が挑むが、後者が落石に打たれて死亡、サルミエントの歴史上唯一の死者となった。

1984年、ウェールズのアラン・ヒューズとポール・デ・メンガールはプンタ・アレナスからカヤックでアプローチしたが、登頂は失敗に終わった。

主峰に初登頂してから30年後、「レッコの蜘蛛」隊を率いたマツフェイは西峰を目ざし、86年のクリスマスイブに初登頂を成し遂げた。

1993年には英国のスーザン・クーパーが女性として初めて主峰を試みた。クラドック・ジョーンズ、フィリップ・スウェンソン、ヘンリー・トッドと挑んだ彼女だったが、目的を達することなく引き返す結果となった。

1995年には国際的なスターを集めたチームが西峰に挑んだ。英国のステイヴン・ヴェナブルズ、オーストラリアのティム・マツカートニースナイプ、米国のジム・ウィックワイア、ジョン・ロスケリー、チャリー・ポーターの面々で、悪天候と不慮の事故に災いされて計画のすべては実現できなかったものの、未踏の南東壁にルートを採って第2登に成功した。

1999年、チリのセルヒオ・エチェバリアとエルマン・ジョフレは米国のジャック・ミラーと3人で挑むが、悪天候に阻まれて登頂は成らなかった。

この年、同じくサルミエントに魅せられたクライマーが西峰に向けた一連の挑戦に手を染めた。ドイツのラルフ・ガンツホルンで、彼は2002年、05年、10年と執拗に挑み、最後にはロベルト・ヤスパールとイェレン・ヘラーという実力派クライマーを擁して西峰の第3登を果たした。北稜伝いの攻撃は72年アニョロットイ隊とほぼ同高度で終わったが、そこから北壁に大胆なトラバースを敢行、最後は86年レッコの蜘蛛隊がたどったルートで頂上に立った。

1999年にはブラジル人たちもやってきた。ネルソン・バレッタ、ナティボ・フランセン、エドワルド・ロペスとアルゼンチンのヴァルテル・ロツシーニで、これが失敗に終わったあと03年に、チリのフリオ・コントレラスを加えて再挑戦。登頂は成らなかったものの、のちに賞を取ったドキュメント「エクストレモ・スル(南の果て)」を制作した。チリ隊の挑戦は2002年にも行なわれた。クリスチャン・ガルシア・ウイドプロ、フェリペ・ハワード、デイエゴ・ベルガラ、ティト・ガナ、

パブロ・グティエレス、ニコ・ベッチ、ビビ・イツソ、タリ・サントイパニエスのチームは、再び不安定な天候に妨げられた。

2004年、スペイン・アンダルシアのイバン・ハラとホセ・アントニオ・ペレス・ホルへの試みが失敗に終わった翌05年、同じ国から強力なチームがやってきた。人気のTVDキュメンタリー「アル・フィロ・デ・ロ・インポシブル」撮影隊のホセ・カルロス・タマジョ、イニャキ・サン・ピセンテ、ミケル・サバルサだったが、悪天候に祟られて本領を發揮するには至らなかった。

ナール、マルティン・フィックワイラー、クーン・ホフステード、エドウィン・クラークによるもので、3つのキャンプを進めたものの、視界の悪さが頂上への道を閉ざした。その2年後にはスイスのエアハルト・ロレタンとロモロ・ノタリスも追い返されている。

### ダーウィン山脈2013

サルミエント東峰の初登頂から57年が経過した昨年、ダーウィン山脈の多角的な調査を目的とする遠征隊がチリで編成された。実施時期は南半球の冬にあたる7、8月で、ゴンサロ・カンポスとジーノ・カザッサが20名の一行を率いた。目的は年輪



上・登攀中、喉の渇きをいやすマルティネス（8月24日）。  
下・ハイキャンプの夜、攻撃の準備をする（8月24日）。



強風から逃れるために雪洞を掘った（8月22日）。



ベルクシュルントに取付く（8月24日）。

年代学調査と、自動気象観測装置およびGPSの設置、スチルとフィルム撮影、シーカヤック、そして登山である。一行は帆船アルコ・イリスでサルミエントに赴いた。

登山チームは二つあり、クリスチヤン・ドノソ、マリオ・セプルベダ、ウベール・キリラオの偵察隊は7月21日から8月9日に一帯を踏査すると共に西峰を試登。主峰を狙うチームに貴重な情報を提供した。カミロ・ラダ、ナタリア・マルティネス、イネス・ドサイジャントは8月19日、西側の海岸にBCを設営した。23日には晴天の窓が訪れるという予報に接して、30日間を見込んでいた作戦を急遽速攻に切り替えた。

よく踏まれた森林帯の道を過ぎてからスキーを履いて300<sup>メートル</sup>上がる



北壁の登攀（8月24日）。

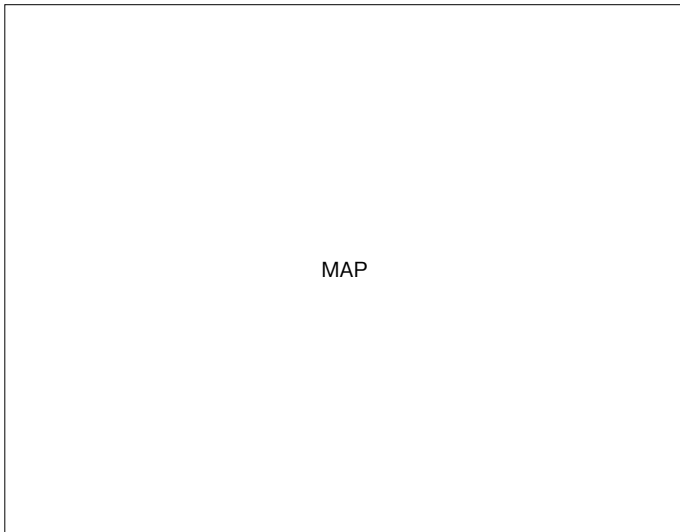
と、山岳気象の世界に投げ込まれた。視界が悪いうえ、最高40<sup>メートル</sup>近くなる強風にはしばしば斜面に腹ばいで耐えなければならなかった。ヴィットーレのコルでは雪洞を掘って一時退避を余儀なくされるほどだった。22日には、標高1200<sup>メートル</sup>のノース・コルにハイキャンプを設営した。予報どおり好天は23日に訪れ、翌日ももってくれた。イネスはハイキャ

ンプを守り、ナタリアと筆者が北壁を攻撃する。

24日の午前3時45分、理想的なコンディションの下に私たちは出発した。風はなく、一面の星空に周囲の山々が影絵となって浮かび上がっている。青白い月光を浴びて急ぎ、夜明け前にはベルクシュルントに着いた。ここでスキーを脱いで登山靴に履き替え、400<sup>メートル</sup>頭上の頂上を目

ざす。シュルントの弱点は5<sup>メートル</sup>ほどのハングした壁で、80<sup>センチ</sup>もの分厚い霜氷におおわれていた。しばしフリーで越えようとした挙句、アックスをシャベルに持ち替えて壘壕を掘り、固い氷を求めながら斜上する。

ここを越えると視界は劇的に開け、氷のカリフラワーにはさまれたガリーが続いていた。75度を越えることはないが気を抜けない傾斜が続く。



MAP

MAP

登攀ははかどる一方でプロテクションには少々苦勞させられる。アックスのリズムにアイスクリューのメロデー。まさしく夢の実現で、忘れた記憶を残す登攀になった。

6ピッチ目を行くころ、短い冬の日が終わりにかけ、静かに伸びていく影が急がなければと告げる。この機会を逃せば、こんな好条件は1ヶ月待っても訪れないだろう。ほどなく風が吹き出し、あたりは暗くなつて世界は、ヘッドランプの照らし出す数分の範囲だけになった。

えらんだガリは、氷のマッシュルームに囲まれた凹型劇場に突き当たるので、危険な賭けにはちがいがなかった。しかし、左にあるマッシュルームが壁から離れていて、頂上斜面への脱出路を提供してくれそうなのは写真から判別できていた。

一歩ごとに左を見ては出口を求めた。写真で見たのは空想かと疑いはじめたころ、ヘッドランプの光芒にそれが浮かび上がった。巨大なマッシュルームにはさまれたそこは、風が掘ったトンネルになっていた。これを抜ければもはやこの先に難所はない。腰までもぐる粉雪の深さに驚きながら歩を進める。

暗闇のなかだが、頂上が間近なことは容易に察しられた。そこは同じくらしいマッシュルーム二つから成っていたが、どうやら東側のほうが高いようだ。長年の夢が実つたのは午後10時45分、マウリとマツフェイが初めてこの頂に足跡を印してから57年の歳月が経過していた。

線に現れて周囲を照らし出し、無限の空間に自分たちのいる場所を示してくれた。

実際なく続くように思われた下降の間、ヘルメットに落ちてくる氷のかけらが格好の眠気覚ましとなった。疲れてはいたものの、幸福感に全身を満たされてベルクシユルントの基部に降り立ったのは、二度目の太陽が昇るころだった。

深くなってきた霧が立ち込め、風も強さを増してきた。幸運な時間は過ぎ去って山はいつもの天候をとりもどしたのだ。片方の目でスキーの先端を、もう一方でGPSをにらみながらゆっくりとキャンプに向かった。最初は白一色のなかの黒い点だったのが求めていた場所に代わった。

午前10時、30時間にわたった登攀を終えてハイキャンプに帰り着いた。肉体は疲れきっていたが、心はこのうえない達成感に満たされていた。



筆者らの登攀中、アルコ・イリス号はサルミエント西面をさぐった。

◆DATA  
フエゴ島モンテ・サルミエント東峰 (2207m)  
北壁初登攀、2013年8月24日～25日、カミロ・ラダ (チリ)、ナタリア・マルティネス (アルゼンチン)。

◆日程  
8月19日●カミロ・ラダ、ナタリア・マルティネス、イネス・ドサイジャントの3名で西岸のバルドネッキア浜にBCを設営。  
8月22日●ノース・コル (1200m) にハイキャンプを設営。  
8月24日●午前3時45分、ラダとマルティネスが北壁から攻撃。19時間にわたる登攀の未午後10時45分頂上に立ち、さらに10時間かけて往路を下降、25日午前10時ハイキャンプに戻った。  
8月29日●すべての撤収を終えてフエゴ島を後にする。

頂上は1956年に初登頂したイタリア隊以来57年ぶりの第2登で、同時に冬季初登頂にもあたる。ルートはSuerte de Sarmiento (サルミエントの幸運、400m) と命名。グレードはD+だが、遠隔地にあることや天候のきびしさからくるコミットの度合いを考慮に入ると、もう一段上のMDを付けてもいいかも知れない。